

## 研究室紹介

### 和歌山県果樹試験場かき・もも研究所

和歌山県はミカン、ウメ、カキの収穫量が全国1位、イチジクの収穫量が全国2位、キウイフルーツの収穫量が全国3位、スモモの収穫量が全国3位、モモの収穫量が全国5位の果樹産地です（令和3年産農林水産統計。イチジクのみ令和元年産特産果樹生産動態等調査）。なかでも県の北部地域では古くからカキやモモの栽培が盛んに行われてきました。和歌山県果樹試験場かき・もも研究所は、1953年（昭和28年）に県北部の果樹農家の強い要望を受け、果樹試験場紀北分場として旧粉河町（現在：紀の川市）に設置されました。2002年（平成14年）に農林水産総合技術センター果樹試験場かき・もも研究所と改称したのち、2012年（平成24年）に果樹試験場かき・もも研究所と改称し現在に至ります。

当研究所は県内に3箇所ある果樹関係の試験研究機関のうちの一つで、カキ・モモをはじめとする落葉果樹に関する試験研究を分担しています。7名の研究員が配置されており、そのうち3名が病害虫に関する業務を担当しています。以下に、病害虫担当が現在取り組んでいる主な研究課題を紹介します。

#### 1 カキ炭疽病の防除対策

県内では近年、カキ炭疽病の発生が増加傾向にあることから、県内における薬剤耐性菌の発生状況を調査しています。

#### 2 カキオリジナル品種‘紀州てまり’の病害対策

カキの和歌山県オリジナル品種‘紀州てまり’は年によって灰色かび病や果実黒すじ症状が果実が発生し問題となっています。そこで、防除対策を確立するため、有効薬剤の選抜などを行っています。

#### 3 特定外来生物クビアカツヤカミキリの緊急防除対策

クビアカツヤカミキリは2012年に愛知県で被害が初めて確認された侵入害虫です。本県でも2017年に成虫を確認し、2019年にモモで被害を確認し、分布域が急速に拡大しています。本県の重要品目であるモモ、スモモ、ウメを加害し、加害された樹は急速に枯死に至ることから、本県果樹栽培はかつてない危機に晒されているといえます。本虫の緊急防除対策として、フラスの遺伝子診



カキ炭疽病



クビアカツヤカミキリの飼育状況※  
※特定外来生物であるため、環境省の許可が必要。



ドローンによるカキへの農薬散布

断技術の開発、有効薬剤の探索、物理的防除技術の確立等に取り組んでいます。物理的防除技術では、樹へのネット被覆や樹木保護用資材を用いた産卵抑止技術開発を行っています。

#### 4 ドローンを利用したカキの病害虫防除技術の開発

カキ園地は傾斜地が多く、農薬散布は重労働です。近年はドローンによる農薬散布技術が注目されていますが、果樹では防除効果の知見がなく、高濃度少量散布が可能な農薬も極めて少ない状況です。そこで、カキにおけるドローンを利用した農薬散布技術を確立するため、病害虫の防除効果の解明、ドローンで散布できる農薬を増やすための適用拡大試験に取り組んでいます。

（主査研究員 大谷洋子）